オルドスの風

中山光典

オルドスの風

中山光輿

朝日新聞社

中山光典（なかやまみつのり）
大正8年5月　熊本県玉名郡菊水町に生れる。
昭和15年3月　大分高等商業学校を卒業。同年4月　満洲炭礦株式会社に勤務。昭和18年10月　竜烟鉄礦株式会社に勤務。昭和21年6月　帰国。現在　経済調査に従事。日中友好協会（正統）世田谷支部理事。
現住所　世田谷区成城2－9－16

オルドスの風
昭和四十七年八月十五日　第一刷発行
六八〇円
著者　中山光典
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　東京・名古屋・大阪・北九州　朝日新聞社
©中山光典　一九七二年

0095—254021—0042

まえがき

本多　勝一

正確な数字を知ることは不可能であろうが、明治以来一九四五年の敗戦までの間に、朝鮮や中国をはじめとするアジア諸国に出ていった日本人は、たいへんな数に違いない。そのほとんどは、個人としては良心的な人もいただろうが、結局は侵略者として出ていったものと考えざるをえないであろう。兵隊はいうに及ばず、いわゆる〝民間会社〟関係で出た人々も、基本的には侵略者としての制約を超えることはできなかった。

そうした日本人は、現地で何をしていたのだろうか。具体的にどんなことをしてきたのだろうか。ふしぎなことだが、これが案外わかっていない。ベトナムでアメリカ人が何をしているかは、かなり具体的に、その全貌をつかむことができる。ところが当の日本人が、朝鮮や中国で何十年間やってきたことは、戦後二十数年すぎた今でも、どうも具体的につかめていない。東北地方(満洲)で敗戦直後にひどい目にあったという話や、自慢話に近いような戦記モノの類には、かなり具体的な報告が多いが、明らかに侵略だったこの長い期間、侵略として具体的にどういう行為をやってきたかは、意外にわかっていない。

原因は、いろいろ考えられよう。しかし、このような私たち日本人のあいまいな態度が、結局A級戦犯の岸信介を平然と総理にする現象、紀元節や靖国神社を復活させてしまう現象などとつながってゆく。最近私は、中国での日本軍の足跡をたずねて、被害者たちから直接きいた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

結果を報告したが（拙著『中国の旅』参照）、その反応の中に「今さら恥部をあばかなくても」といった類がかなり多いことを知り、ますますその感を深めた。知らなければならない。侵略とは具体的に何だったのかを、私たちは〝知る権利〟がある。そのための最もよい方法は、当事者自身がくわしく証言することであろう。勇気のいる作業だ。できればシラをきりとおしたいと思うのが当り前だと思う。しかしそのことが、またしても私たち日本人を「いつか来た道」へ連れてゆくための、大きな力になってしまうのだ。

本書の著者・中山光典さんは、こうした勇気のいる作業をすすめてくれた数少ない帰還者の一人である。原稿を読んで、当時の〝民間会社〟の実態を具体的に知ると同時に、中山さんの素直な心と、目ざめてゆく過程とに私は感動した。『中国の旅』の取材で、タコ部屋のような労働で使い殺されてゆく中国人たちの様子はよくわかったが、使い殺す側としての〝民間会社〟の日本人たちがどんな生活をしていたのかは、この本によってよく理解できると思う。

いうまでもなく、中山さんも時代の制約の中で生きていた。自分の勤める会社で、狩り集められた中国人労働者たちがどんな生活をしているのか、そのひどい現場をあまりよくは見ていない。侵略した側の人間の目には、侵略された側の苦しみなど、最初から知ろうとしないのが最も当り前の現象なのだ。見ようとしない。いや、かいま見ることはあっても、たとえばアメ

リカ合州国の一般的白人にとっては黒人など「見えない人間」であるのと同様、それは「見た」ことにはならない場合が多い。にもかかわらず、読者は中山さんの文章の端々に、使い殺されている中国人労働者たちの、地獄の生活をのぞくことができよう。たとえば次のような文章がある。

「一つの坑（大成採礦所）が吹き飛ぶほどの炭塵爆発だ。一大轟音とともに黒煙もうもうと坑口を噴上げ、切羽から切羽へと折り重なる苦力の死体が約四百もあった。事件は当時、史上何番目かの大規模な炭礦事故として噂されたが、新聞には報道されなかった」（一七ページ）

四百人もが死んでも、中国人労働者など「見えない人間」であり、消耗品なのだから、新聞のタネにもならない。事故がなくても毎日使い殺されてゆくのでは、単に死因の相違があるにすぎない。たとえばまた、次のような文章がある。

「すると今度は、横田の鋲のついた軍靴が（拷問の）相手の腹部にのしかかっていく。『うおーッ！』口から水を噴いた。いや、水というには濁った、臓腑のようなものがあふれて……」（五九ページ）

私が中国人側から取材した通りのこうした拷問が、日常的に行なわれていたのである。そして「人間の肉なら幾らもころがっていた。宣化城の城壁下を洋河に向けて歩くと、苦力の死体

が雪に埋まっていて、晴天の日に雪がとけだすと、ぶわぶわの腐爛屍体がのぞく」（八二ページ）のだった。このような人肉を、日本人の肉屋がブタ肉にまぜて売った。また「露天堀の近くの崖に泥柳の樹が何本かあって、その枯枝の列に身の毛のよだつ人間の骸骨が幾つかぶら下がっていた」（一六八ページ）

そうした労働者たちの「工人宿舎」は「一歩足を踏入れると、すえたにおいが鼻につく」「よくうめき声がした。肺結核に慢性下痢、疥癬病患者などが多く、苦力全体の三分の一が疥癬病者だった。真赤にただれた皮膚をかきむしってうめく姿がよく見られ、全身に白粉をふかせてうみたただらせ、高熱を発して狂人のようにわめく者もいた。やがて余病を発して死んでいく」（一二四ページ）

こうした状況を、中山さんのように良心的な日本人でさえ、あまり積極的には「見ようとしない」のだった。しかし、やがて解放区にはいった中山さんは、資本主義社会で毒された人間には想像もつかないような、人民解放軍（八路軍）の真の姿に接する。――「（八路軍の）馬上姿はみな頭や腕に繃帯巻きした負傷兵と、一見して病気らしい兵士ばかりで、指揮官は歩いていた。僕は眼頭が熱くなった。――指揮官は歩き、馬に乗っているのは病人と負傷者ばかりだ。人がこうも大事にされている、正規軍の中央軍が、肩章も襟章もなく、青い服の一色」（二

九〇ページ）

変なことは誰がみても変だし、正しいことは誰がみても正しい。解放区の中山さんは、ついに「天皇は天皇制の天皇だ、弱虫が土下座して仰ぐ土偶だ、無産階級の敵だ！」（二九九ページ）と、興安嶺ごえの山道で考えつくにいたる。ところが、解放区の日本人グループの支部長で、延安帰りの〝本格的革命家〟が、毎朝、東の空の天皇と宮城に遙拝しているのである。〝革命家の先輩〟の中に案外ニセモノが多い現象がよく描かれていて、いまの日本についてもなにか暗示的に思われた。

中山さんのこの本が、より具体的な証言を次々と産みだすための、導火線の役割をになってくれることを、愛国心の人一倍強い日本人の一人として、私は期待する。

オルドスの風

目次

まえがき　本多勝一　1

Ⅱ

宣化城東門外　13
太陽・城壁・苦力　41
丘の上の御殿　65
腐臭　77
民族の壁　111
理想郷　121
二・二六の系譜　149
対決　179
枯野の涯に　209

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

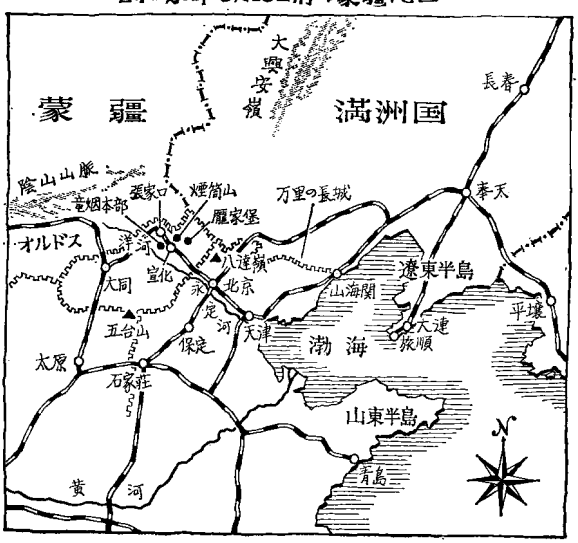
2

八月十五日・北京　229
解放区へ　245
変革の街で　283
長　征　295
死者の伝言　309
あとがき　331

カバー・見返し写真＝勝山泰佑
地図＝大川一夫

1

昭和20年8月15日前の蒙疆地区



宣化城東門外

冬の冷たい風が、野面に、街頭にうそぶく。遠来のうなり声をあげつつ、夜の窓辺をかすめ去っていく。そんなとき、僕はふと耳を傾けながら、どこか遠くへいざなわれ、時空を越えて、さすらっていることがある。それは風の震源地へ向ってだ。北風か北西風か、シベリア風か蒙古風か。どのみちこの日本列島に訪れる冬の季節風はアジア大陸に発生するものだが、僕をいざなうのはその一環となっている「オルドスの風」である。それは、かつて自分がさらされ、身につまされた風であったのだ。

オルドスとは、中国の辺境にある実在の地で、岩石と流砂の不毛地帯だと当時噂された。また一説では蒙古人の発祥の地がそのあたりとかで、蒙古人が自民族を呼ぶのにも使う言葉とも聞いた。なにせその地帯は標高が高いので空気が極度に乾燥し、冬はことに酷寒の高気圧を発

生させる。それが蓄積して温暖な太平洋側へ押出し、日本にも木枯しと吹雪をもたらす。つまり、シベリア風などと並ぶ蒙古風の一種で、アジアに冬をもたらす厳しい季節風である。

そしてじつは、このオルドス地帯と地つづきの、「オルドスの風」が通過していくのど元に、太平洋戦争中の二年余の僕の生活があった。「オルドスの風」という名は、そのあたりに住む日本人の一部が勝手に呼んだものらしいが、それは場所柄、戦慄か恐怖の合言葉でもあった。「どうやらまたオルドスの風が来そうだぞ」とささやく人々の表情には、自然の猛威への畏怖があったばかりでなく、それはまた狼や野犬の群の襲来にもたとえられた。犬も、人間から見捨てられて野性に帰り、狼にも劣らぬ獰猛なものになっていたのである。

人間が生き残れるかどうかの瀬戸際に立たされた時代だった。そして、僕らは日本人だった。つまり現地民衆にとっては異邦人であった。だからこそ、自然の猛威がことのほか身にしみた。日本にとって戦況がますます不利となったころには、その風のざわめきが「敵」、すなわち八路軍（中国共産党軍）の蜂起かとも思われた。

いま僕は、その風のことをなつかしむのではない。その風から過去を引出すのは、その風から邪悪だったあの戦争の亡霊を打払うためである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.